慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カルチュラル・スタディーズ以後の文学社会学
Sub Title	The sociology of literature after cultural studies
Author	松下, 優一(Matsushita, Yūichi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.22- 34
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 文学社会学の可能性
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0022

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カルチュラル・スタディーズ以後の文学社会学

The Sociology of Literature after Cultural Studies

松下　優一

１．はじめに

本稿の課題は、「文学社会学の可能性」について、カルチュラル・スタディーズ（CS）との関係という側面から考察することである。

ブルデュー派の社会学者として知られるジゼル・サピロが書いた文学社会学のテキスト（Sapiro 2014=2017）には、「反映論を乗り越える――発生論的構造主義 vs カルチュラル・スタディーズ」との表題のもと、CS に言及する箇所がある。それによれば CS は、リュシアン・ゴルドマン、ピエール・マシュレー、フレドリック・ジェイムソンらが名を連ねるマルクス主義的文学社会学の展開という文脈に位置づけられる。そこで具体的に言及されるのは、リチャード・ホガートの『読み書き能力の効用』（1957）、レイモンド・ウィリアムズの『文化と社会』（1958）、『長い革命』（1961）、『マルクス主義と文学』（1977）といった CS の創始者とされる研究者たちの著作である。ホガートについては「大衆文化を文学社会学の正当な対象に据えながら」「作品受容の社会学の基礎を築」くもの、ウィリアムズについては「文学生活のための諸制度（編集者・出版社、雑誌、アカデミー、サークル）についての歴史社会学のプログラム」を設定し、「文化とコミュニケーションの社会学へと至る」道筋を切り拓くものとされる（Sapiro 2014=2017:34）[1]。CS は文学社会学と呼びうる伝統のなかに起源をもち、その後は大衆文化と受容者の問題へ、また文学の諸制度を視野に収めつつ「文化とコミュニケーションの社会学」へと拡大的に展開していったという見方が示されているといえよう。

文学社会学からカルチュラル・スタディーズへというこの説明には、立ち止まって考えてみるべきポイントが含まれているように思われる。もし CS が「文化とコミュニケーションの社会学」へ発展していくのなら、その後の文学社会学は CS の個別分野という位置づけになるのだろうか。あるいは、文学社会学は文学を扱う CS と同義なのか。そうであるなら、いまなお「文学社会学」という枠組みを掲げる必要はどこにあるのか。こうしたことは、学問領域の枠に拘らない CS の側にとっては特に問題とならないかもしれないが、文学社会学の側にとってはその存在意義にかかわるような問題としてあったはずである。少なくとも、いまあらためて「文学社会学の可能性」を考えようとする場合、CS 以後の文学社会学がいかなるかたちで定位されうるのかという問題は、問われるべき事柄のひとつとして残されているのではないだろうか[2]。

松下優一「カルチュラル・スタディーズ以後の文学社会学」
『三田社会学』第 24 号（2019 年 7 月）22-34 頁

以下、本稿ではまずカルチュラル・スタディーズが展開された英米圏の、とくに 1980 年代以降の文学社会学にかんする動向整理（Griswold 1993; English 2010）を参照しつつ、CS 以後の文学社会学の研究動向について概観する。そのうえで、CS との関係性という面から「文学社会学の可能性」について検討することにしたい。

２．英語圏の文学社会学の展開——2 つの動向整理から

アメリカの社会学者ウェンディ・グリスウォルドは、1990 年代初頭に「文学社会学における最近の動向」と題してこの分野の動向整理を行っている（Griswold 1993）。それによれば、当時の英米圏の文学社会学は、読者による意味構築の問題、および文学システムを形成するネットワーク組織の問題を焦点に展開されている。そして、この 2 つの主要展開の出発点ないし基盤をなすものとして、カルチュラル・スタディーズが言及されている。

> カルチュラル・スタディーズは、1970 年代から 1980 年代はじめかけて実質的な成長を遂げてきた。この前進に含まれていたのは、土台と上部構造の関係性のより弁証法的な理解へ向けたマルクス主義理論の開放、評判の悪い大衆文化モデルからシンボルの使用者や操作者の側により大きなエイジェンシーを与えるものへというポピュラー文化の再概念化、経済資本の創出あるいは支援に対する文化資本の利用についての洗練された説明、そして文化的生産物は集合的活動の結果として、また市場の内部や様々な種類の国家統制のもとで作動する組織的システムによって生み出されるという視点の確立、であった。（Griswold 1993: 456、但し文献注は省略）

この説明からは、1980 年代後半から 90 年代初頭にかけての時期、英国のカルチュラル・スタディーズだけでなく、ブルデューの文化資本論やベッカーのアートワールド論など視点を異にする複数の文化社会学の流れが複合し、文学社会学の新たな地平が築かれていたことがうかがえる。こうした広い意味での CS のアドバンスのなかで／とともに展開されてきた文学の社会学的研究が、第 1 に文化的生産物の消費者としての読者をめぐる受容研究であり、第 2 に文学の生産・流通にかかわる制度やネットワークに照準する研究だということになる。前者の代表格として挙げられているのは、恋愛小説と女性読者についてのジャニス・ラドウェイの研究（Radway 1984）であり、それ以後、ジェンダーだけでなく、階級・職業的ステイタス・ナショナリティ・生活経験といった諸要因が読者の読みを規定するものとして社会学者によって探求されてきた。グリスヴォルドは、この流れを「ヒーローとしての読者」と形容する。また、文学の生産・流通システムあるいはネットワークに注目した研究としては、制度という視点を組み込んだ作品の内容と時代・社会の関係についての研究、出版社や編集者によるゲートキーパー機能（ある種の作家・作品の排除や促進）、国や地域で形づくられる文学文化の特質、文学関係者たちが形成するネットワークの分析などが挙げられている [3)]。このような動向を踏まえ、

グリスヴォルドは当時の文学社会学の展開可能性を、①文学とアイデンティティの構築と維持との関係、②文学生産の制度分析と読者分析の連結、③構造主義からポスト構造主義へという流れのなかで脱中心化された作者というアクターの再定位、④グローバル化のなかでの文学と他の文化形式の関係の探求といった点に見定めている。

それから 20 年近くを経た 2010 年、『New Literary History』誌は、「新しい文学社会学 New Sociologies of literature」と題する特集を組んでいる。その巻頭、特集の編者ジェイムズ・イングリッシュは、英米圏における 1980 年代中盤以降の文学の社会学的研究の動向を「文学社会学“以後”の文学社会学」と称して整理している（English 2010）。その主な展開として挙げられているのは、第 1 に R・シャルチエ、R・ダーントンに始まる「書物の歴史」研究の拡充、第 2 に新たに台頭してきたデジタル・メディアと文学の関係に関する研究、第 3 に J・ギロリー（Guillory 1994）などのような文学的価値やカノン形成の歴史と論理を扱う諸研究、第 4 に文学研究自体の歴史性やその学問的位置や機能についての「リフレクシヴ・ソシオロジー」（ブルデュー）にあたる研究、そして第 5 に J・ラドウェイをはじめとする「読者と読書」にフォーカスする諸研究である。そのほか、文学と著作権など法制度の関係、文学と人種の問題、文学とグローバル化（「世界文学」研究）、文学と他の表現形式との関係（アダプテーション研究）といった問題系についても該当文献とともに言及されている。

さて、こうしたグリスウォルドとイングリッシュの動向整理（そこで言及される文献の豊富さ）をみるかぎり、英米圏での文学の社会学的研究は、かなりの厚みをもって展開されてきていることがわかる。そして、それはかなりの部分 CS との重なりあいのなかで展開していることも見て取れよう。グリスヴォルドが挙げている 2 つの流れ（読者研究と生産・流通にかかわる制度研究）は、サピロが言及していたホガートとウィリアムズからの展開に照応する。読者研究の分野でグリスウォルドとイングリッシュが共通して挙げている J・ラドウェイの研究は、カルチュラル・スタディーズの教本で言及され（Turner 1996=1999）、そのフィクション研究の代表例のひとつに数えられるものである（Storey 2003）。カノン形成という論点、研究の立ち位置についての再帰性といった論点についても同様だろう [4]。

３.「文学社会学」の消失

J・イングリッシュは 1990 年代から 2010 年までの文学社会学の動向を概観する際、ひとつの興味深い問題を提起している。それは、彼の動向整理の標題「どこにでもあってどこにもない－文学社会学“以後”の文学社会学」に端的に示されているように、90 年代以降の文学の社会学的研究はその充実にもかかわらず、「文学社会学」という枠組みのもとではなされない「文学社会学“以後”の文学社会学」である、という点にかかわるものである。イングリッシュによれば、英語圏で「文学社会学 the sociology of literature」というタームは、1980 年代初頭あたりまでは文学研究者や批評家に広く使われるもので、とくにホガートやウィリアムズに端を発する「ブリティッシュ・カルチュラル・スタディーズ」の内部には文学社会学と呼べるような流れがあ

った（English 2010: vi）。また、その当時アメリカ合衆国の大学の文学理論のシラバスでは、ウィリアムズらの著作とともにゴルドマンの『小説社会学』（Goldmann 1964=1969）やエスカルピの『文学の社会学』（Escarpit 1958=1959）が参考書として提示され、文学社会学と題した大学生向けのハンドブック（John Hall, *The Sociology of Literature,* Longman, 1979）なども刊行されていた。しかし、それ以後「文学社会学」という用語は消えていき、“sociology of literature”を Amazon 検索しても 90 年代に入ってから教本・入門書の出版はなく、文学社会学を冠したカンファレンスやパネルセッションも見当たらない（English 2010: vii）。なぜ「文学社会学」という呼称は消えてしまったのか。

このような問いを立てたイングリッシュは、その大きな要因として、文学研究自体において伝統的研究方法に対する「異議申し立ての姿勢 dissident mode」が正統性を獲得したことを挙げている[5]。T・ベネットは 1960 年代・70 年代は「文学社会学の“時期”」（the sociology of literature “moment”）だったというが（Bennett 2010）、その時期は新批評（ニュー・クリティシズム）（作品の内在的精読）が文学研究において依然権威性を有し、作品の読み方を規定していた時代に重なる。文学作品の社会的規定性を強調する文学社会学は、作品を外的文脈から切り離して読むニュー・クリティシズムなどのフォルマリズムとの関係でその存在意義を発揮したが、1980 年代から 90 年代にかけて文学研究において批評理論（そこにはマルクス主義的アプローチも含まれる）がヘゲモニーを獲得していくと、文学の社会的文脈を検証する研究は文学社会学の専売特許ではなくなる。それに伴い「文学社会学」という枠組み自体が批評的にアクチュアルな意味合いを担えなくなった、というのである。

> いまや多くの文学研究者たちが、初歩的な意味において、文学の社会学者となったため、“文学社会学”と呼ばれるような明確な学派あるいはアプローチを特定する必要性は乏しくなった（中略）ポスト・コロニアル批評、クイア理論、新歴史主義――それらが共有する学問上の使命は、文学を社会的なものに結びつけること、つまり、文学テクストや文学的実践の説明を、その生産における社会的諸力、その形式的特徴がもつ社会的意味、その流通や受容の社会的効果を参照しながら与えることである。（English 2010: viii）

したがって、今日なおウィリアムズらの著作が読まれるにしてもそれは「文学社会学」という旗印（バナー）のもとではない（English 2010: vii）。では、彼らの著作が集められる旗印が何かと言えば、それは「カルチュラル・スタディーズ」、あるいは「文化唯物論」[6]ということになるだろう。

４．CS 以後の文学社会学のために

以上、90 年代以降の英米の文学社会学に関する 2 つの研究動向整理から見えてくるのは、カルチュラル・スタディーズあるいはポスト・コロニアル批評などの批評理論の影響下に展開される文学研究との重なり合い、そのなかで「文学社会学」という呼称さえ失われていくという

事態である。ここでもやはり、CS との関係で文学社会学はどのように位置を定めればよいのか、という問題に立ち至る。CS 以後、なおも「文学社会学」を維持しようとするなら何らかのかたちで CS との差異が問われざるをえない。

ひとつの選択肢は、もはや「文学社会学」という枠組みや名称にこだわる必要はない（実質的に社会学的であるなら、あえて「社会学」を名乗る必要はない）、というものだろう。じっさいイングリッシュは「文学社会学“以後”」になされた社会学的文学研究を豊富に示している。しかし、ラベルがその内実を構築するとすれば（H・ベッカー）、これは単なる名称の問題として済ませるわけにはいかないのではないか。

別の選択肢としては、経験的実証主義に基づく社会科学に拘り、社会学は文学を成立させる社会的条件の研究、あるいはより確実に社会学らしさが主張できる分析（たとえば社会調査に基づく量的分析）に特化して差別化を図るべきだという立場がありうる。これは、かつてロベール・エスカルピが示した文学社会学の立場であり（Escarpit 1958=1959）、じっさい『Critical Inquiry』1988 年春季号で組まれた特集「文学社会学」の編者たち（グリスヴォルドは、その 1 人）によれば、1980 年代までのアメリカの文学社会学はそのようにして文学研究ないし文学批評と棲み分けてきたようだ。

> 文学批評家は**作品**、**テクスト**、**書き手**、そして**読み手**に注目する。彼らは、文学の**創作**、**受容**、**解釈**について思考する。他方で、社会科学者は、**書物**や文学的**制度**について論じたり、文化的**生産物**の**生産・流通・消費**について書いたりする。たとえば、アメリカの社会学部門で文学社会学は一般に制度や市場にフォーカスするものであり、関心に応じてその中心には出版、編集者や書店のネットワーク、著作権法や検閲規範、流通戦略、特定の社会集団の読書習慣などがくる。芸術作品の特殊な性質――テクストを「文学」にするもの――は、まず問題にされない。（Ferguson et al.: 422-423、太字は原文イタリック）

ある種のテクストを「文学」にするもの、すなわち文学的特殊性（文学性）を括弧に入れ、外在的な分析にとどまること。文学の内実（文学テクスト）にかかわる問題は「文学批評」の問題であるとして扱わないこと。こうした潔い断念は、たしかに社会科学としての社会学にとっては当然の態度なのかもしれない。しかし、外在分析に専念するという立場決定は、文学社会学がその名に反して「文学」を対象化できないという矛盾をもたらし、内在分析と外在分析の対立という文学社会学の伝統的問題を追認・強化することにつながる。

第 3 の選択肢は、したがって「文学社会学」という名称・枠組みを放棄せず、しかも文学の外在分析に自己限定するのでもなく、内在分析と外在分析の対立を乗り越えるような道筋を探し続けるというものになるだろう。じっさいグリスヴォルドらが指し示すのはそのような道であり、「文学研究と社会学のあいだの対立（中略）文学社会学が乗り越えるべきは、端的に言ってそうした対立なのである」（Ferguson et al.: 428）。フランスの文学社会学でも、作品の内在分

析と外在分析の対立をいかに乗り越えるかが理論的な賭け金とされる（Bourdieu 1992=1995; Aron et Viala 2006; Sapiro 2014=2017）。

以下、第 3 の立場を引き継ぐという観点から、カルチュラル・スタディーズの文学研究と文学社会学とを差異化しうるものについて検討したい。問われるべきは、「文学社会学」という枠組みだからこそできること、すなわち CS ではなく「文学社会学」という枠組みによってこそ可能になるような論点や問題設定の仕方があるのではないかという点であろう。

５.「文学」の捉え方——A・ミルナーによる文学研究と CS の節合を事例に

こうした点について考えていこうとするとき、A・ミルナーによる『文学・文化・社会』（Milner 2005）は、タイトルが示すように文学研究とカルチュラル・スタディーズと社会学のあいだを架橋しようとする試みであり、文学に照準しながら「カルチュラル・スタディーズ」という枠組みだからこそできることを問い直そうとしている、という意味で示唆的である。

ミルナーによれば、ホガートやウィリアムズに端を発する、英文学研究からカルチュラル・スタディーズへという流れは「社会学的転回 the sociological turn」として捉えられる（Milner 2005:14）。「伝統的な文学研究が文学を無時間的で“美的な”カテゴリーとして定義してきたのに対し、カルチュラル・スタディーズは文化的価値を社会的に構築されたものとしてみる」、そして CS は伝統的に「文化的アイデンティティ、そして階級・ジェンダー・人種やエスニシティといったような社会的不平等の“社会学的”指標とみなされるものについて関心を寄せてきた」（*ibid.*:15）。

ミルナーは、このようにカルチュラル・スタディーズが文学研究の社会学化だという見方を示す一方で、文化を研究する社会学のほうは、デュルケームやパーソンズのように「共通の価値システム」の解明をその中心的な研究課題に据えながらも、文化的価値を量的に測定する社会科学的に「客観的な」方法を追求してきた結果、研究対象である文化の外部に留まり、たとえば「『スター・トレック』のファンの平均的な年齢や性別や階級」を捉えるだけだった、と指摘する（*ibid.*: 17）。つまり、伝統的な文学研究が文学を自己完結的なものとみなし社会性への視座を欠くものだったのに対し、社会学の側には文化の内実を理解するアプローチとして限界がある。したがって、その両者の限界を乗り越えるところに CS のポテンシャルがある、ということになる。

しかし、カルチュラル・スタディーズは、これまで必ずしも文学研究と社会学のあいだに見出されるはずの可能性を十分に追求してこなかったという。ここでミルナーは、CS を文学研究との関連から 2 つのヴァージョンに区別している。①文学研究とポピュラー文化研究を接続することで切り拓かれる新たな研究領域としてのカルチュラル・スタディーズ（‘immodest’ version）と、②文学以外のポピュラー文化の研究というテーマ内容によって定義されるカルチュラル・スタディーズ（‘modest’ version）である（*ibid.*: 22-3）。このような区別が導入され、以下のような指摘が続く。

ウィリアムズやホガート自身の明らかに不穏な immodest な企てにもかかわらず、カルチュラル・スタディーズの内にある一般的・直接的な衝動は、文学を放棄し、いまなお本質的にリーヴィス的な用語で非-文学 non-literature として理解されるところの文化のほうに向かった。確かにバーミンガム・センターは、とくにホールが所長に任命された 1968 年以降、徐々に「社会学的」性格を強めていった。しかし、制度的に区別されたかたちで非-文学を扱うカルチュラル・スタディーズの「分離展開」は（中略）不幸な妥協のようにみえる。というのも、カルチュラル・スタディーズの真の保証は、新たな経験的主題の発見にあるのではなく、従来フィクションから文学を、文化から芸術を、大衆的なものからエリート的なものを区別してきたまさに理論的な境界の「脱構築」にこそ含まれているからだ。（*idid.*: 23）

言い換えれば､ホガートやウィリアムズによる初期のカルチュラル･スタディーズの企ては、文学研究をポピュラー文化研究へと切り拓くという意味で、既存の文化的区分とそれに則った学問分野の区分を乗り越え「脱構築する」ような境界侵犯的なものだった（＝①‘immodest’ version）。しかし、その後の CS は、より大衆的でより日常的な文化形式の探求へと向かい、また階級・ジェンダー・人種といった社会的不平等の問題を見据えた「文化の政治学」を前面に押し出していく[7]。そのなかで、CS は「非 - 文学」としてのポピュラー文化研究に専心するようになり、結果的に文学研究と棲み分けてしまう（＝②‘modest’ version）。

おおよそこのような問題意識から、ミルナーは「映画をミルトンに置き換えようとするのではなく、両方とも研究するのが、私には最良の CS のように思える」（*ibid.*: 40）と述べ、伝統的な文学研究の対象である狭義の文学と映画をはじめとするポピュラーな文化形態を同時に射程に収めるような CS を主張する。それは、具体的には『創世記』から映画『フランケンシュタイン』まで、というようなジャンル横断的な研究というかたちをとるものである。

以上のように、ミルナーの論は、文学研究と社会学的研究のあいだで、カルチュラル・スタディーズだからこそできる文学へのアプローチを問うものと言えるだろう。ミルナーが提案するような研究のかたちが文学を扱う CS の典型例かどうかはさておき、そこに示される文学に対する認識論は、CS と文学社会学の関係を考えようとする私たちにとっては示唆的なものを含んでいるように思われる。端的にいえば、ミルナーの提示する CS は、「文学」を扱ってはいても、「文学社会学」とは言い難い。「文学」を解明課題にしているとはいえないからである。ミルナーの取った立場は、文学だけでなく、映画、テレビドラマなど多様なフィクションの形式を並列的に扱うものであり（そのことで学問分野の境界の越境・侵犯が可能となる）、それは文学に対する多分に戦略的な見方と不可分である。「カルチュラル・スタディーズにとって『文学』は『文化』のサブシステムである（中略）文学と非 - 文学の間の区別は、程度 degree の区別であり、種類 kind の区別ではない」（*ibid.*:195）。ここには、文学を他の文化形式から特殊化

するという態度、あるいは文学的特殊性にこだわるという態度への拒否がある。文学の特殊性という考え方は文学テクストの内在的精読という伝統的な文学研究のスタンスに結びつくものであり、そこからのブレイクスルーとして出発した CS にとっては受け入れがたいものになるのだろう[8)]。

まとめよう。ミルナーが提示しているのは、新批評（内在分析）と書き手や読み手の社会的属性についての社会学（外在分析）を乗り越えようとするひとつの道筋だったといえる。それは、文学と文学以外の差異を「程度の差」であると捉え、個別の表現領域の枠を越えたところで「文化」を把捉することによって可能となる。その乗り越え方に、カルチュラル・スタディーズの文学に対するスタンスが見て取れる。しかし、文学が文化のサブシステムであるとして、「文学」と「非 - 文学」の差異、つまり文学と映画やマンガやテレビといった視聴覚文化の諸形式との間の差異を「程度」の問題だとする認識論に立つとき、内在分析の対象がジャンル横断的に拡大していくことになり、そうなると「文学」を積極的な研究対象とする社会学としての「文学社会学」は成立しなくなる。文学をどのような対象として捉えるか。CS と文学社会学が袂を分かつとすれば、ここにひとつのポイントがあるように思われる。

６．おわりに――「文学社会学」の可能性

「文学社会学は、文学的事実を社会的事実として研究対象にする」（Sapiro 2014=2017: 7）。ジゼル・サピロによる文学社会学のテキストは、この宣言とともに開始される。前節で検討したミルナーの例から見えてくるのは、カルチュラル・スタディーズは「文学的事実」をそれ自体として解明対象にしないということである。文学テクストが読解の対象にされるにしても、それは文学以外のテクストとの連続性においてであり、その読解によって文学という枠を越えた何らかの共通文化的な価値の探求が目指される。より大衆的・より日常的な文化領域へという志向性、あるいはより広範な「文化とコミュニケーションの社会学」を志向するという CS の立場からは、個別文学的なものに照準すること自体が捨て去るべき旧弊とみなされよう。文学という表現形式の特権化を拒否し、諸々の文化テクストを縦横に横切って行くところにカルチュラル・スタディーズの意義（魅力）があるとすれば、これに対して文学の個別性・特殊性（＝「文学的事実」）をそれ自体「社会的事実」として探求の対象に捉えることができるというところに文学社会学の意義がある。

文学の「特殊性」に照準するからといって、それは必ずしも文学の「特権化」を意味しない。グリスヴォルドらは、文学社会学による文学の捉え方を「悪魔の鏡」というメタファーで説明している。「悪魔の鏡」とはアンデルセンの『雪の女王』に登場する、悪魔の発明した鏡であり、良いものや美しいものを邪悪で醜いものに変えて映し出す。文学はこの悪魔の鏡のように、「現実のある側面を拡大したり減じたり、あるものを撚り合わせたり引き離したりする」（Ferguson et al. 1988: 429）。だから、文学社会学は、「いかにして、そしてなぜ、特定のテクストやジャンルや時期や書き手が、ある特定の仕方で映し出し、別の仕方ではないのか」（*ibid.*: 429）につい

て明らかにすることを目指すべきだというのである。

ホガートやウィリアムズが、イギリスにおけるマルクス主義的文学社会学の展開を担っていたという点で、カルチュラル・スタディーズと文学社会学とは、その系譜や関心において重なり合うことは確かだろう。しかし、多くの関心を共有しつつもなお、具体的な対象に則して問いを立ち上げていく際に、両者のあいだには射程や見方の差異が生じ、CS ではなく文学社会学という枠組みだからこそ正面から扱えるような問題がある。たとえば CS の立場からは特定の作品の形式的・文体的特徴やある作家に特異な文学実践などといった個別文学的な問題を解明の対象にするようなテーマは設定しづらくなるだろう [9]。文学作品に内在する個別的特徴（特定の文学テクストの平面に観察できる事柄）は、「文学的事実」を「社会的事実」として捉える文学社会学においては正面から解明課題に据えることができるはずである。そして、そのような問題設定を可能にするところに、「文学社会学」という呼称の存在意義、また CS との関係における文学社会学の可能性は見出されるのではないだろうか。

【註】

1) カルチュラル・スタディーズの教本において、ホガートとウィリアムズの功績は「文学以外の文化的表現形式、たとえば大衆音楽や大衆小説など」をテクストとして「読む」という試みを開始したことにあると紹介される（Tuner 1996=1999: 22-3）。

2) 周知のように日本では 2000 年前後にカルチュラル・スタディーズに関する入門書・解説書が集中的に出版され（Turner 1996=1999; 吉見 2000,2003; 上野・毛利 2000; 吉見編 2001; 本橋 2002）、これに前後して CS をどう受け止めるか、その可能性や限界についての議論が文学研究者（中川 2001; 石原ほか 2004; 富山 2003）や、文化社会学者らによってなされている（南田・辻 2008; 大野 2011）。たとえば文化社会学者の南田勝也は「文化作品が、時には階級や人種や国家の性質を表示する記号としての効果を持つことを指摘したカルチュラル・スタディーズは、多くのフォロワーを生み、現在でも、映画や小説や音楽やアニメーションなどに秘められたイデオロギー性を分析する研究が生まれている。ただし、これらの方法は、過度に政治性を強調する（つまり、作品コミュニケーションよりもそのバックグラウンドが主題となってしまう）あまり、実際のファン心理と乖離してしまうという声もある。また、文化作品の持つ豊饒な意味を、階級やジェンダーなどのイデオロギーに還元してしまうことにもつながりかねず、還元主義と呼ばれることもしばしばである」（南田・辻 2008: 54-55）と指摘している。

3) たとえばエリザベス・ロングによる第二次大戦後のアメリカのベストセラー小説の変化と読者層の変化に合わせた出版社の市場戦略の関係にかんする研究（E.Long, [1985]2017,*The American Dream and the Popular Novel*, Routledge）や、ヴィクトリア朝の女性作者がある出版社によっていかにしてドミナントな著者性の位置から「片隅に追いやられ」たかを明らかにする研究（Gaye Tuchman with Nina E.Fortin, 1989, *Edging women out: Victorian novelist, publishers and social change*, Routledge）などが挙げられている。

4) 瀬崎圭二は、CS と日本近代文学研究における「文化研究」は必ずしもイコールではないとしながら、

両者の「共通の問題意識」として、「文化的実践や〈文学〉を歴史的、社会的な構築物として捉える認識」、「言説の浸透、実践の反復によって形成されるヘゲモニーの批判的考察」、「分析者が属する環境、制度そのものへの問いかけ」を挙げ、「中でも、教育、研究上の環境、制度の変化や、当事者としてのその場に対する自己言及は、CS や『文化研究』的な方法がもたらした重要な成果であったように思われる」としている（瀬崎 2016：113-115）。日本近代文学研究の CS 受容においてメルクマールとされるのは、小森陽一・紅野謙介・高橋修ほか『メディア・表象・イデオロギー』（小沢書店、1997 年）、金子昭雄・高橋修・吉田司雄ほか『ディスクールの帝国』（新曜社、2000 年）といった「明治三〇年代研究会」の成果である（中川 2001; 石原ほか 2004; 瀬崎 2016）。

5) 1995 年に出版された『文学の文化研究』と題する論集の序論で、英文学者の川口喬一も同様のことを指摘している。川口によれば「最近の文学研究は、従来の伝統的な方法から離れて、ますますいわゆる文化研究に向かい」、「芸術作品としての文学鑑賞からいわゆるイデオロギー批判への転換」が進み、「文化的政治学の一フィールドとして文学を見る立場」が優位に立つようになっており（川口 1995: 3）、「最近の文学研究の最大の特徴は、文学研究は批評的研究であること、そして批評的研究は文化批判的であるという前提にある」（*ibid.*: 14）。

6) たとえば P・バリーによる文学理論の教本では、文化唯物論の解説の中でレイモンド・ウィリアムズの名が言及される（Barry 2009=2014: 216）。小説の書き手でもあったウィリアムズの多岐に渡る仕事に関しては、高山（2010）参照。

7) 以下、ジョーダンとウィードンによれば（Jordan & Weedon 2006）、ホガートやウィリアムズに端を発する CS は、文学的伝統の階級性や研究対象となる文化の定義の狭隘さを批判的に検討し（→文学的カノンの研究や文学研究自体の歴史性・政治性）、「文化」についての考え方を刷新するとともに分析に値する文化テクストの範囲を拡張し、文学研究において発展した「精読 close reading」の手法を狭義の「文学」以外のより広範で日常的な文化テクストに適用していった。さらに 1969 年から 79 年までのバーミンガム大学現代文化研究センター（CCCS）所長を務めたステュアート・ホールの指揮下で、CS は記号論やアルチュセールやグラムシといった大陸系の理論を取り入れながらメディア・言語・イデオロギー・権力と文化の関係についての理論的精緻化を図り、メディア・オーディエンスの日常的実践の研究を推進する（→読者論）とともに、マルクス主義だけでなくフェミニズムやマイノリティ文化運動やポスト・コロニアル論の問題関心と連動しながら「文化の政治学」を全面に打ち出していくことになった。

8) CS あるいは批評理論の影響下で、文学的固有性についての問題が看過される点については文学研究者によってしばしば指摘されている。「現在隆盛をきわめる文学研究には、文学の審美的次元への積極的無関心がある」（川口 1995: 5）。文化の政治学へという CS の展開のなかで「文学研究に由来する美的価値の問題は、主体性、アイデンティティ、社会的意味や価値、権力といった諸問題への関心に、大部分が置き換えられていった」（Jordan & Weedon 2006: 246）。また J・イングリッシュによれば、CS を特徴づけてきたのは、よりポピュラーで「日常的な」文化的諸形式へという反エリート主義的な志向性であり、文学研究から文化研究へという拡大の代償は「文学的対象の特殊性 specificity を弱めること」だった（English 2008: 127）。「“階級・人種・ジェンダー”という文化の政治学 cultural politics、そうした観点か

らすれば文学作品は、アイデンティティに根ざす社会的闘争の道具としての有用性／非有用性を越えた重要性や価値をもたない」（*ibid.*:126-27）。

9) 芸術社会学者のアン・ボウラーは、従来の芸術社会学は、美的自律性の問題や作品の中身に関する問題を捉え損ねてきたとし、美的自律性を特権化するのではなく他の社会的過程と同等の分析対象に据え、両者をそれ自体社会学的な探求や説明の対象に据える方法を模索している。そのなかで CS の限界について、ポピュラー文化への特化や文化の政治性（抵抗的側面）の研究の公準化を挙げるとともに、たとえば抽象表現主義のような対象に対するアプローチとしてどこまで有効なのか不明だと指摘している（Bowler 1994: 257）。

【文献】

Aron, Paul, et Alain Viala, 2006, *Sociologie de la littérature*, Paris : PUF.

Barry, Peter, 2009, *Beginning Theory: An Introduction to Literary and Cultural Theory (3ed)*, Manchester: Manchester University Press.（＝2014, 高橋和久監訳『文学理論講義』ミネルヴァ書房.）

Bennett, Tony, 2010, “Sociology, Aesthetics, Expertise”, *New Literary History* 41(2):253-276.

Bourdieu, Pierre, 1992, *Les Règles de l’art: Genèse et structure du champ littéraire*, Paris : Seuil.（＝1995,石井洋二郎訳『芸術の規則I』藤原書店.）

Bowler, Anne, 1994, “Methodological Dilemmas in the Sociology of Art”, Diana Crane ed, *The Sociology of Culture: Emerging Theoretical Perspectives*, Cambridge : Blackwell, 247-266.

Easthope, Antony, 1991, *Literary into Cultural Studies*, London : Routledge.

English, James F, 2008, “Literary Studies”, Tony Bennett and Jonh Frow (eds), *The SAGE Handbook of Cultural Analysis*, London : SAGE, 126-144.

————, 2010, “Everywhere and Nowhere: The Sociology of Literature After ‘the Sociology of Literature’, *New Literary History*, 41(2):v-xxiii.

Escarpit, R., 1958, *Sociologie de la littérature*, Paris : PUF.（＝1959, 大塚幸男訳『文学の社会学』白水社）

Ferguson, Priscilla, Philippe Desan, and Wendy Griswold, 1988, “Editors’ Introduction: Mirrors, Frames, and Demons: Reflections on the Sociology of Literature”, *Critical Inquiry*, 14(3):421-430.

Frow, John, 2010, “On Midlevel Concepts”, *New Literary History*, 41(2): 237-252

Goldmann,Lucian, 1964, *Pour une sociologie du roman*, Paris : Gallimard.（＝1969, 川俣晃自訳『小説社会学』合同出版.）

Griswold, Wendy, 1993, “Recent Moves in the Sociology of Literature”, *Annual Review of Sociology*, 19:455-467.

Guillory, John, 1994, *Cultural Capital: The Problem of Literary Canon Formation*, Chicago : The University of Chicago Press.

Hoggart, Richard, 1957, *The Uses of Literacy: Aspects of Working-Class Life with Special Reference to Publications and Entertainments*, London : Chatto & Windus.（＝1974, 香内三郎訳『読み書き能力の効用』晶文社.）

Jordan, Glenn and Chis Weedon, 2006, “Literature into culture: Cultural Studies after Leavis”, Patricia Waugh ed, *Literary Theory and Criticism*, Oxford : Oxford University Press, 245-255.

石原千秋・富山太佳夫・沼野充義, 2004, 「座談会　カルチュラル・スタディーズ再考」『文学』5(2):152-174.

川口喬一, 1995,「文学研究から文化研究へ——パラダイムの転換」川口喬一編『文学の文化研究』研究社出版, 3-40.

Milner, Andrew, 2005, *Literature, Culture and Society (second edition)*, London: Routledge.

南田勝也・辻泉編, 2008,『文化社会学の視座——のめりこむメディア文化とそこにある日常の文化』ミネルヴァ書房.

本橋哲也, 2002,『カルチュラル・スタディーズへの招待』大修館書店.

中川成美, 2001,「文学研究とカルチュラル・スタディーズ——〈文化研究〉とは何の謂いか」『日本文学』vol.50, 52-63.

大野道邦, 2011,『可能性としての文化社会学——カルチュラル・ターンとディシプリン』世界思想社.

Radway,Janice, 1984*, Reading the Romance: Women, Patriarchy, and Popular Literature*, Chapel Hill : University of North Carolina Press.

Sapiro,Gisèle, 2014, *La sociologie de la littérature*, Paris : Éditions La Découverte.（＝2017, 鈴木智之・松下優一訳『文学社会学とはなにか』世界思想社.）

瀬崎圭二, 2016,「カルチュラル・スタディーズ」日本近代文学会編『ハンドブック日本近代文学研究の方法』ひつじ書房, 112-120.

Storey, John, 2003, *Cultural Studies and the Study of Popular Culture (second edition),* Athens : The University of Georgia Press.

高山智樹, 2010, 『レイモンド・ウィリアムズ——希望への手がかり』彩流社.

富山太佳夫, 2003, 『文化と精読』名古屋大学出版会.

Turner, Graeme, 1996, *British Cultural Studies : An Introduction*, London : Routledge.（＝1999, 溝上由紀・毛利嘉孝・鶴本花織・大熊高明・成実弘至・野村明弘・金智子訳『カルチュラル・スタディーズ入門——理論と英国での発展』作品社.）

上野俊哉・毛利嘉孝, 2000,『カルチュラル・スタディーズ入門』筑摩書房.

Williams, Raymond, 1958, *Culture and Society 1780-1950*, London : Chatto&Windus.（＝2008, 若松繁信・長谷川光昭訳『文化と社会 1780-1950』ミネルヴァ書房.）

————, 1961, *The Long Revolution*, London : Chatto&Windus.（＝1983, 若松繁信・妹尾剛光・長谷川光昭訳『長い革命』ミネルヴァ書房.）

————, 1977, *Marxism and Literature*, Oxford : Oxford University Press.

吉見俊哉, 2000,『思考のフロンティア／カルチュラル・スタディーズ』岩波書店.

————, 2003,『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』人文書院.

————編, 2001,『知の教科書 カルチュラル・スタディーズ』講談社.

（まつした　ゆういち　神奈川工科大学等非常勤講師）